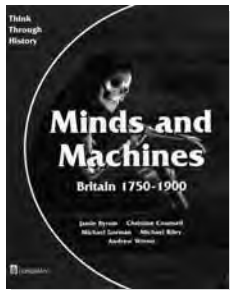


～海外の教育に学ぶ～

イギリス 歴史教科書

ロングマン(Longman)社 KeyStage3 (中学生用) 歴史教科書 Think Through History



『Medieval Minds (中世の精神)』	イギリス 1066 - 1500年』	128頁
『Changing Minds (変わる考え方)』	イギリス 1500 - 1750年』	128頁
『Minds and Machines (精神と機械)』	イギリス 1750 - 1900年』	128頁
『Modern Minds (現代の精神)』	20世紀の世界』	128頁
『Citizen's Minds (市民たちの思考)』	フランス革命』	152頁
『Meetings of Minds』	イスラームとの交流』	96頁

●イギリスにおける歴史教育の変遷とその目標

イギリスにおける歴史教育をさかのぼると、年代や史実の理解ばかりでなく、原典を利用し証拠に基づいて現実起こった歴史上の諸問題について考える思考力を伸ばすという目標が立てられたのは、1970年代であった。そのような教育方針は、1988年におけるGCSE (通常16歳で受験する中等教育修了にあたる試験) の導入以降定着した。1991年にナショナルカリキュラム (日本の学習指導要領にあたる。以下NC) が初めて導入されたことにより、5～14歳の児童・生徒を対象とした歴史教育がカリキュラムの中に組み込まれた。このNCにおいては、**史料の批判的な見方や異なる解釈の比較法を習得し、自分たちでの結論の出し方や、自分たち自身で説明し、物語をつくり、解釈を組み立てていく方法を学ぶこと**などが規定されている。

●授業スタイルと教科書の特徴

授業の際は、生徒が知識を築きつつ考える取り組み・参加型・発展型のアクティビティを多用し、複数のテキストを利用して指導している。具体的には、ディベート、グループワーク、ドキュメンタリーの作成、幅広いジャンルの資料分析などである。3年間で、イギリス史・ヨーロッパ史・世界史を学習する。

イギリスの歴史教育において特徴的なのは、一社の教科書一冊のみを使って教える教師はまずいないということである。通常は、教室に3、4冊ほど他の教科書が置かれ、それらはアプローチの仕方や思想が対照的なものの方が望ましいとされている。また、教師自身が作成した資料、特に原典や映画・芸術品・データ資料などを用いて、教科書の記述を補う場合も多い。学問的価値の非常に高い教科書ですら、単独で学習に用いられることはない。それは、**歴史構造にまさに批判的な視点を持ちながら関わっていくよう育てる**という、NCの目的に反することになるからである。

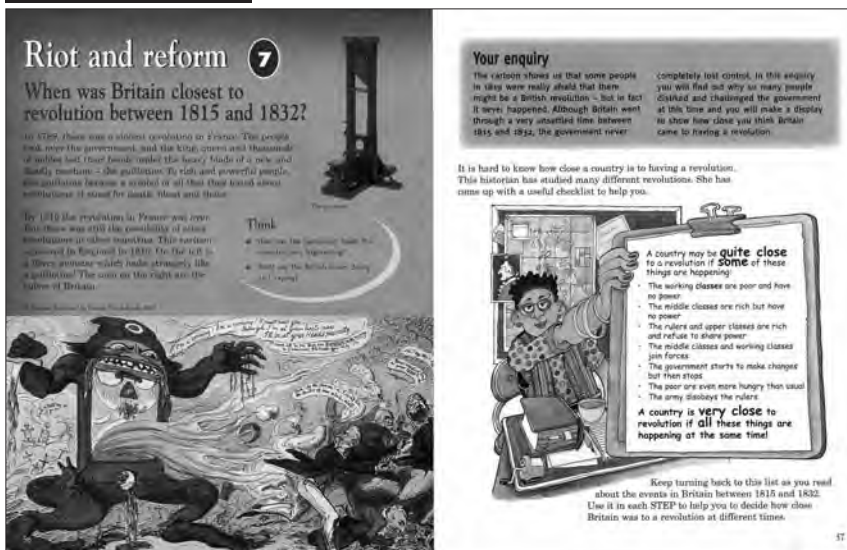
ロングマン社歴史教科書「Think Through History」は、イギリス史 (中世・近世・近代) と欧州・世界史 (フランス革命・現代史・イスラーム) の計6冊で構成される、中学生が使用する教科書である。

知識の教授だけでなく、『生徒が歴史家の立場だったらどう考えるか』というように、思考を訓練する構成になっている。また、過去を過去としてだけでなく、事例として考えることで、意思決定や立場の選択を考えるなど現在の行動にもつながる内容になっている。

史実の提示・説明や資料の掲載だけでなく、それぞれの単元において物語性をもたせるなど生徒に興味を持たせる工夫も随所に施されているのが特徴的である。

教科書見開き例

『Minds and Machines』 p.56-57 より)



△この教科書の特徴△

○思考を訓練する構成になっている

「あなたが歴史家の立場だったらどう考えるか」というような問いかけで、生徒に考察させる。知識の教授よりも、歴史家の思考を追体験させることで、**歴史を通して考えさせる構成**である。

○批判的に見る力が求められている

歴史に関する複数の解釈を自己で判断する力を養う。複数の解釈を比較・分類することにより自らの考えを深める。

○過去を事例としてとらえる

過去を過去としてのみ認識するわけではなく、今とどのようにつながっているのか、**意思決定や立場の選択・行動**といった現在における実践にもつながる内容である。この点はシティズンシップ教育とも共通している。

○人物を全面に出している

歴史は人物が作り上げるものという概念のもと、歴史上の人物や場面が生き生きと表現されており、感情移入しやすい。

↑写真のみならず風刺画も多用している。↑歴史家が示すリストを参考に、革命が起こりうる可能性を自ら考察する。